

日本臨床宗教師会
Society for Interfaith Chaplaincy in Japan
設立趣意書

人はさまざまな苦難の中で自己の支えを失ってしまい、「なぜこのような目にあうのか」「生きる意味はどこに」と頭をかかえます。「日本臨床宗教師会（Society for Interfaith Chaplaincy in Japan）」は、困難にあえぐ人々の悲しみに寄り添いつづけた宗教者の伝統と臨床経験を尊重し、「臨床宗教師」の養成に取り組む諸大学の研究者、宗教、医療、社会福祉等の専門職、臨床宗教師研修修了生の有志が集い、相互に研鑽し、「臨床宗教師」に関する倫理綱領の遵守、養成教育・継続教育の支援と連携、実践と教育に関する研究、啓発、資格認定、関係諸機関との連携を推進することをめざして設立いたします。

「臨床宗教師（interfaith chaplain）」とは、被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者です。「臨床宗教師」という言葉は、欧米の聖職者チャプレンに対応する日本語として、岡部健医師が2012年に提唱しました。「臨床宗教師」は、布教・伝道を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、苦悩や悲嘆を抱える人々に寄り添います。さまざまな専門職とチームを組み、宗教者として全存在をかけて、人々の苦悩や悲嘆に向きあい、かけがえのない物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を行います。「臨床宗教師」の呼称は、チャプレン、ビハーラ僧、パストラルケアワーカー等を包み込み、宗教宗派を超えて宗教者が協力する願いがそこに込められています。仏教、キリスト教、神道など、さまざまな信仰を持つ宗教者が協力しています。

2011年の東日本大震災を機に、医師・看護師らによる心のケアと共に、宗教者による被災地支援活動がさまざまに展開し、悲しみに寄り添う宗教者の社会的実践が被災者にとって生きる希望となりました。支えたい宗教者自身が被災者の優しさに支えられ、生きる意味を学びました。これを承けて、2011年に宗教学者らによって宗教者災害支援連絡会が設立され、2012年から東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座において理論教育と臨床実習を組み合わせた臨床宗教師研修が始まり、その後、諸大学研究機関もこれに取り組んでいます。すでに修了者は150名を超え、全国各地で活動しています。ソーシャルキャピタルとしての宗教の役割が見直され、社会から臨床宗教師への期待も高まりつつある中で、「日本臨床宗教師会」は、現場に立つ者と教育を担う者が協力して、臨床宗教師の教育と実践を支援し、そのあるべき姿を検討する共通基盤を構築してまいります。将来的には、臨床宗教師が新しい専門職として心のケアを実践するために、臨床宗教教育の継続研修に基づいて「臨床宗教師」資格認定制度を確立することを視野にいています。

さかのぼれば、チャプレン、教誨師、パストラルケアワーカー、ビハーラ僧、スピリチュアルケアワーカー、スピリチュアルケア師、臨床仏教師、もしくは寺社教会の内外での社会貢献などさまざまな形で、宗教者は世界の安寧を願い、苦悩する人々のために献身してきました。「日本臨床宗教師会」はこうした先駆者たちに敬意を払いつつ、公共空間でケアを提供する宗教者の研鑽と、学び合いの場を作ります。大いなるものの慈しみにいだかれて、謙虚に自己をふりかえります。

あらゆる領域において、苦悩する人々に寄り添い、祈り、光を届けられる社会になるよう、貢献したいと思えます。

2016年2月28日
日本臨床宗教師会役員一同